

## 川越に牛が来た頃(川越の犁)

博物館では毎年収藏品展を開催し、今年で4回を数えることができました。今年では米づくりに関わる農具を中心に展示しましたが、最近は見かけなくなった農具もあり、懐しく感じられた方も多かったようです。

今回の展示を準備する過程でとくに興味を感じたのは、川越で使われた犁とそのためにつれてこられた牛達についてです。

犁とは、牛や馬にひかせて土を耕起する道具のことです。川越周辺の田では、昭和30年代まで写真のように牛で犁をひく光景を見ることができました。

ところで、「牛」に「犁」をひかせることは川越ではいつ頃から始まったのでしょうか。

日本での犁の使用は、奈良時代まで遡ることができます。「カラスキ」と呼ばれて畿内で使われていたことが記録に残っています。その後の全国各地の利用状況について知るのには難しいのですが、江戸時代から明治初期頃、特に北九州地方に普及していたことが知られています。

川越地方の状況については、明治以前は不明



犁による耕起 川島町 矢内敏氏撮影

ですが、明治14年に開催された全国農談会に出席した埼玉県代表の古老の話として「一部の条件のよい田では、馬による耕起が行われているが、多くは人耕である」という記録が残されています。条件のよい田で使われた犁とはどのような犁かといいますと、博物館に収蔵されている古いタイプの犁と考えられます。写真の犁は下広谷で使われていたものですが、同じ形のもの名細、鴨田地区でも残されています。聞き書きによると、湿田で用い馬にひかせたことが共通しており、明治時代初期にはこのような大



下広谷地区で使われた古いタイプの犁

型の犁が一部で使用されていました。

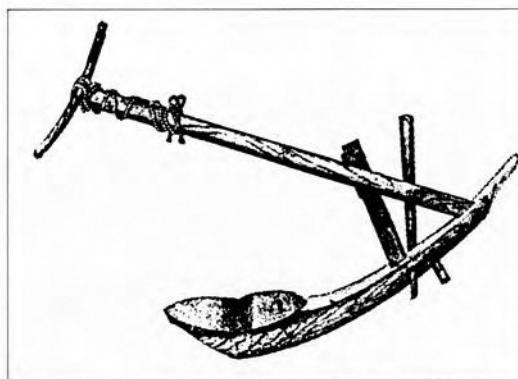
明治8年の埼玉県郡村誌によると、川越市域には馬1261頭、牛10頭が飼われており、犁が使用される条件はあったのですが、実際には農耕にはあまり使われず、運搬などに使用されていたようです。

さて、明治時代もおちついてくると地方間の情報交換がさかんになり、また政府も米の増産を第一として振興しました。人による田起こしは、重労働の上あまり深くは耕せません。当時、深耕するほど収穫が上がると考えられていましたので、先進地区であった北九州地方の犁の普及が、官民一体の努力で全国に広がっていきましました。当時北九州地方で使われた犁は、抱持立かかえもったてすき犁とよばれる無床犁で、主に馬にひかせるものでした。

さて下の表は、埼玉県統計書による入間郡における牛馬数と田における牛馬耕の普及率を表にしたものです。明治14年当時「一部で馬が使われている」と記されてからわずか30年で牛馬耕の普及率79%と驚異的な発展をとげています。このときは牛86頭に対して馬1401頭であり、馬が犁をひくのが一般的でした。

恐らく明治の中頃から末にかけての一時期、馬に北九州地方からもたらされた犁をひかせて田を耕起していたと推定されます。

ところが、明治時代末になるとこの「馬によ表…入間郡における耕牛馬数と牛馬耕普及率



抱持立犁（「日本地産論」より）

る耕起」というスタイルに変化が見え始めます。馬にかわって牛が使われるようになるのです。

この変化の時期を物語る興味深い資料として「時田家文書」があります。

当時山田村の農会長であった時田善次郎が残した耕牛に関する文書類は28点ですが、これをまとめると次のようになります。

明治42年、埼玉県庁は馬にかわる畜力として耕牛を県内に広めようと共同購入の取扱いを始め、まず埼玉県下の有志14名に耕牛をあっせんしました。山田村上寺山に住む時田善次郎もいちはやく耕牛を購入した一人です。時田氏はこの時97円で岡山県産の和種を購入しましたが、他の11名が購入したのは県の技師が推すデボン雑種だったのです。和種の成績は良好であったものの、デボン雑種は、力が弱く高い飼料代が必要との不満が出、明治43年の県会に波乱をお

年度	耕牛数	耕馬数	普及率(%)	年度	耕牛数	耕馬数	普及率(%)
明治44	86	1,401	79.0	大正7	95	1,161	52.2
大正元	93	1,569	81.6	8	104	1,197	51.8
2	100	1,336	79.6	10	433	1,137	54.2
3	98	1,398	78.6	11	679	1,055	65.2
4	69	1,358	59.4	12	931	961	63.3
5	94	1,382	51.2	昭和12	2,279	766	61.7
6	102	1,356	51.5	9	2,336	771	63.5

普及率 = 牛馬耕地 ÷ 総段別





時田家文書

こしました。雑種を奨励する県と和種や朝鮮牛の優秀さを主張する時田氏らの農家の反目はその後も続き、明治44年2月4日付の国民新聞にも詳細が報道されています。

時田氏は、独自に和牛と朝鮮牛の共同購入を企画し、あくまで県の方針と対立する姿勢をみせています。時田家文書では、この争いの結末を知ることはできませんが、明治43年生まれの金靴屋（馬や牛の蹄鉄を打つ職人）である谷島重太郎さんによると、大正時代から扱っている役牛は、殆ど朝鮮牛であったとのことですので時田氏側に軍配が上がったようです。

このように埼玉県下における耕牛の導入にはかなりの軋轢があったものの、明治の末頃から牛が川越に来るようになりました。馬から牛にかわった理由として時田善次郎は、飼育費が低くてすみ、深耕するには馬よりもはるかに有効であり、また、疲弊した牛を高く引き取ってくれる業者があることなどをあげています。

また、犁の改良が著しく進んだことも理由の1つです。馬にひかせる抱持立犁を扱うには高度な技術が必要でしたが、牛にひかせることができ安定性の高い短床犁が、明治の終わり頃から熊本県や福岡県で製作されるようになりました。時田氏らが企画した共同購入の要項には、牛とあわせて肥後犁の斡旋もしており、牛と短床犁は、同時期に導入されたようです。

博物館に保存されている犁は、ほとんどが短床犁です。老舗である磯野犁（福岡県）や日の本犁（熊本県）、明治時代末頃から頭角をあらわした高北犁（三重県）、松山犁、上田犁（ともに長野県）そして、地元では、明治43年創業の田島犁（川島町）など各地の製造所が、明治末からはげしい競争をしていました。



田島製作所製富士1号

こうして、川越地方では明治時代末から馬にかわって牛が犁をひくようになり、大正12年頃には馬と牛の頭数が逆転し、その後は牛に犁をひかせて田おしをする光景が定着しました。これは、昭和30年代までつづきましたが、その後トラクターが登場すると、牛はいなくなり犁は納屋にしまいこまれてしまいました。

以上川越地方における犁の歴史を簡単にみてきましたが、耕牛の歴史は50年あまり、馬による耕起の時代を合わせても短い歴史でありました。私が犁にひかれるのは、それまで地域のなかで発達し地元の農鍛冶につくられた農具の時代から、全国に流通網をもつ大規模なメーカーに製造された農機具の時代に移行してゆく過程を語る最適の資料であると思うからです。

#### 《主な参考文献》

（社）大日本農会編『日本の鎌・鍬・犁』  
飯沼二郎 他『農具』法政大学出版局  
川越市立博物館『収蔵文書目録(四)』時田家文書  
（学芸員 田中 敦子）

## 川越城本丸跡第4次調査について

### (1) はじめに

今回の発掘調査は、川越城本丸北門復元事業に伴う基礎資料の収集を目的として、平成5年1月から5月まで行いました。調査の対象は、川越市郭町2-5-12、市営テニス・コート跡地の約1800㎡です。

### (2) 川越城の歴史

川越城は、川越台地東端に位置する平城です。本城は、長禄元年(1457)、関東管領上杉持朝の居城として太田道真・道灌によって築城されました。以来、幾度かの改修を経て近世城郭としての形態が整ったのは、松平信綱が藩主だった寛永16～承応年間(1639～1655)頃と考えられています。今回の調査地点は、慶応3年(1867)の『川越城図』によれば、本丸と二の丸の間の堀の一部に当たり、川越城の内堀の検出が当初から予想されていました。

### (3) 検出された遺構

今回の調査では、縄文時代住居跡1軒、古墳時代住居跡9軒、平安時代住居跡2軒、鎌倉から南北朝時代の館の堀と考えられる3号堀など、川越城築城以前の遺構も多数検出されました。

また、1号堀、4号堀、1号井戸跡など戦国時代の川越城の遺構も確認されましたが、中心となったのは、幕末の川越城の遺構です。

幕末の遺構は幅20.0m、深さ5.0mの2号堀の北側から検出されました。ここは、弘化3年(1846)の火災で焼失するまで城主のすまいが置かれていた川越城の二の丸に当たります。検出された遺構には、1-A・1-B号土坑などの大形土坑のほか、115号土坑のような地下室があり、いずれも多量の瓦、陶磁器、焼土で埋められています。これらは、火災によって廃絶した二の丸御殿に関わる遺構と考えられます。

### (4) 出土した遺物

原始・古代の遺物の中で、注目されるのは平安時代の瓦塔です。瓦塔は木造五重塔を模した土製の塔で、東日本に多く分布しています。この瓦塔がどんな人々によって建立されたのか、今後検討してゆかねばなりません。

方形館の堀である3号堀からは、渥美産の甕、常滑産の甕、片口鉢、鳶口壺などの陶磁器が出土しています。これらは鎌倉から南北朝時代に焼造されたものです。館の営まれた時期を考える上で重要な手がかりとなります。

幕末の遺物の大半は、1-A・1-B号土坑、115号土坑から出土した陶磁器です。これらの多くは、前述した二の丸御殿で使われた日用雑器と考えられます。特に「小杉碗」と呼ばれる信楽産の煎茶碗や緑釉土瓶、伊万里産の煙草の火入れなどは多量に出土しています。

### (5) まとめ

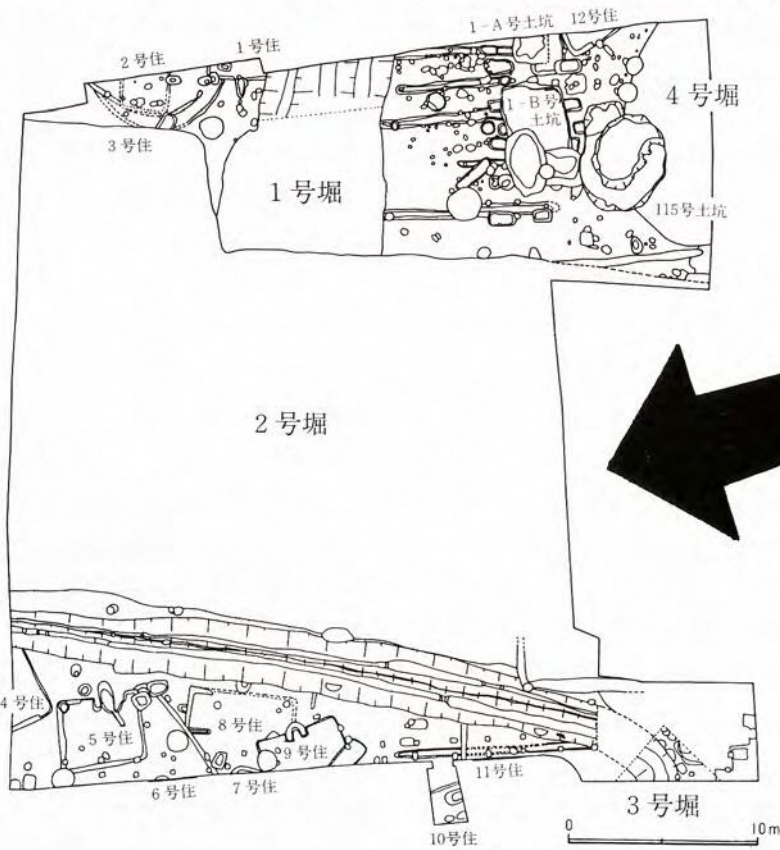
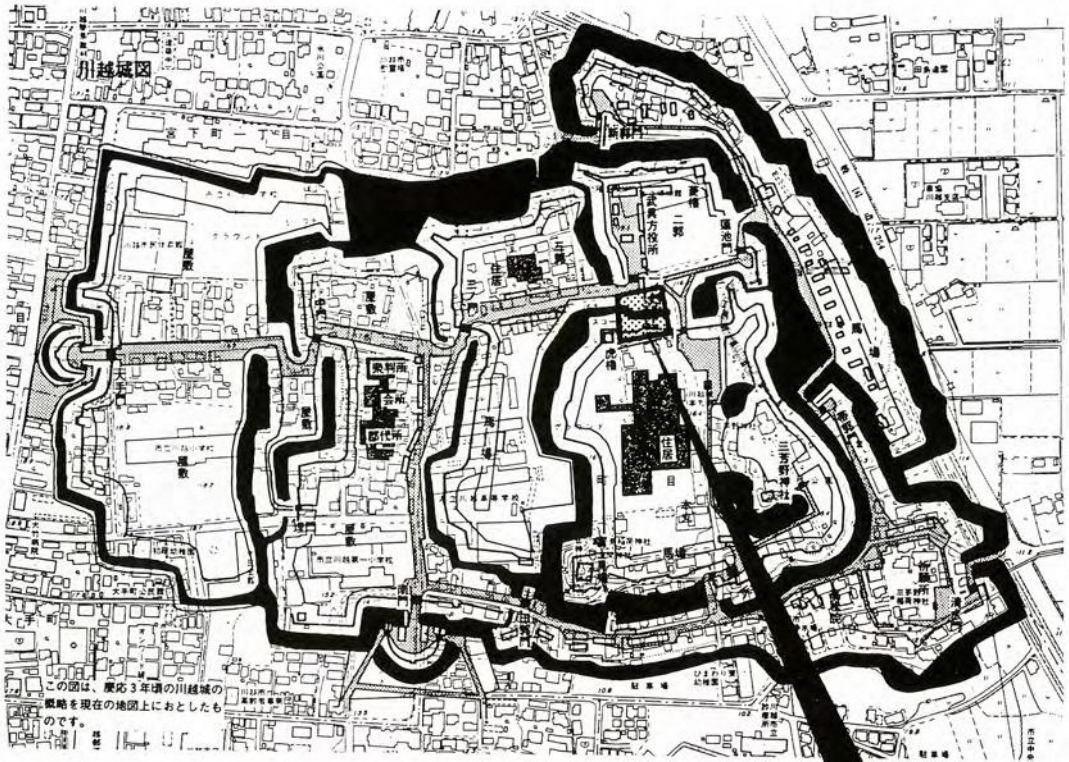
今回の調査では、幕末の遺構に伴い江戸文化の豊かさを物語る多くの遺物が出土しました。また、築城以前の遺構・遺物も多数検出され、原始・古代以来、川越城の周辺が重要な役割を果たしていたことがわかります。

(学芸員 岡田 賢治)



江戸時代の出土品





川越城本丸跡  
第4次調査  
全測図



## 川越城から学んだ城 ～相馬中村城について～

### (1) はじめに

現在、川越城址整備事業の一環として、本丸北門の再建築が検討されている。

しかし、本丸北門の姿を推定できる資料は、江戸時代初期の「江戸図屏風」、幕末の「本丸住居絵図」（光西寺蔵）が知られる程度である。

そこで、考証のため予備調査として近世城郭・陣屋のある全国約330県・市町村に対してアンケートを実施し、現在整理中である。

今回はその中から、川越城に関わる伝承を持つ中村城（福島県相馬市）について紹介したい。

### (2) 相馬家と川越城

寛永11年(1634)閏7月6日、川越城主酒井讃岐守忠勝は、京都において3代将軍徳川家光から若狭小浜城主への転封を命じられた。翌7日には、空城となった川越城の城番として、年少のため上洛の供奉を免じられていた陸奥中村城主相馬虎之助義胤が命じられた。この命令は、御機嫌伺いのため上洛中の家臣からの飛脚により江戸の義胤へ伝えられた。

そこで、29日に義胤自ら鉄砲100挺、弓30張、鏑300挺等を率いて江戸を出発し、8月1日には川越城を請け取った。こうして、相馬家の川越城番は、翌12年(1635)3月1日に川越城主が堀田加賀守正盛に決定し、5日に堀田家の家臣から義胤に伝えられ、7日に幕府目付に川越城を引き渡すまで約7ヶ月間にわたって続けられた。

### (3) 中村城の築城と構造

近世城郭としての中村城は、相馬虎之助義胤（祖父の長門守義胤と区別して大膳亮義胤と称する）の父である16代利胤としたねが関ヶ原の戦い後の慶長16年(1611)、小高城から本拠地を移したことに始まり、以後幕末まで相馬氏累代の居城となった。

その構造は、標高24.2mの自然丘陵に本丸を置き、東・南・西の二の丸、東・西・北の三の丸、岡田館等の曲輪が配置された東西600m、南北650m程度の規模を持つ平山城で、陰の城（守りに主眼を置いた城）としては大変巧妙な縄張である。

### (4) 川越城と中村城

安政4年(1857)、相馬藩が漢学者の齊藤庄八ひろたか郎完隆に命じて編纂させた『奥相志』には「内まる城…（中略）…前門おおもも 一二の門共に東面原一の門なし。衡門の外に廊橋あり。後の義胤公、武州川越の城を居守、その城門の堅きを見、その図を摸してこれを改造せり。時に慶安元年戊子八月二十四日刻事を始め、晦日棟上、十月成る。…（中略）…後門からめてもん 元西面に門を立て、橋を西の空塹ほりに架せり。慶安元年戊子八月、川越城後門の図の如く、南面に改造…（後略）」、「東三の丸…（中略）…一の門東面、二の門南面、これを外大手門といふ。…（中略）…慶安二己丑年、武州川越城門の図を摸して改造し、八月十四日柱を立て、晦日棟をあげ十月就る。」と二ヶ所にわたり中村城の門が川越城を参考に改造されたことが記されている。

しかし、本丸の前門一の門（高麗門）二の門（楼門）・後門（楼門）及び東三の丸大手二の門（楼門）は明治時代に破却され、現在見ることはできない。また、唯一の遺構であった東三の丸大手一の門（高麗門）は、平成4年6月7日、事故により倒壊したが今年の7月22日に再建された。

それでは、義胤が参考とした川越城の門とはどの門であろうか。

当時の川越城は、松平伊豆守信綱による修築以前の状態であることから、本丸（天神曲輪含

む)・二の丸・三の丸(八幡曲輪含む)から成っていたと考えられる。したがって、幕末の川越城と門の配置が同じならば、本丸に北門・天神門、二の丸に二の丸門・蓮池門、三の丸に三の丸門があったと推定できる。

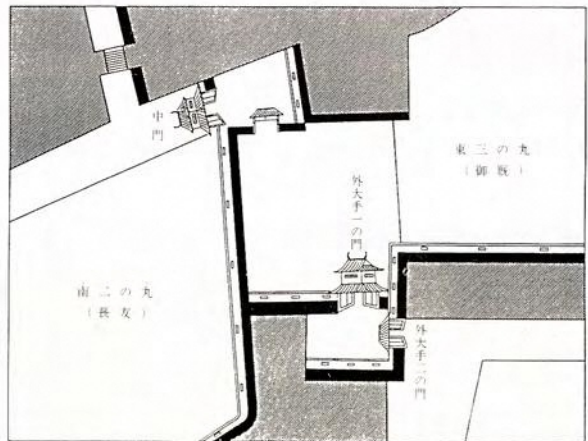
以上のことから、義胤はこれらの門を参考に中村城の門を改造したと考えられるが、現時点では互いに比較対照できる資料が発見されおらず、相互関係を特定することは困難である。

しかし、藩命による編纂物に記されている以上、ある程度の信憑性があるということは否定できないのではないだろうか。



◀中村城外大手一の門写真(倒壊前)

▶中村城外大手一の門付近略図  
(『相馬市の文化財』8より)



【参考文献】

『相馬市史』通史編

資料篇1「奥相志」

『寛政重修諸家譜』8

相馬市文化保存会『相馬市の文化財』6・8

(5) おわりに

中村城は、川越城を参考として改造された直後の慶安2年(1649)から落雷により天守閣が焼失した寛文10年(1670)5月までが、もっとも充実した時期であった。

一方、相馬義胤がその堅さに感心した川越城には本丸御殿の一部を除いては現在その姿を伝える建築物はほとんど見る事が出来ない。

今後の計画実施については、更に多くの資料の発見に努めるとともに、条件が似通った他の城郭を参考に考証を進めていくことが、課題であろう。

『相馬藩世紀』(写本=相馬市図書館蔵)

『大猷院殿御実紀』『国史大系 徳川実紀』2

(学芸員 鹿倉 航)



## ●●●ただいま準備中●●●

平成5年12月1日(水)から平成6年1月16日(日)まで「地中からのメッセージ～第1回出土品展～」を開催いたします。今回の展覧会では、川越市内の遺跡から近年発掘された最新の考古資料を紹介いたします。

展示室には「1.地中からのメッセージ」「2.仙波貝塚とその周辺」「3.南大塚古墳群とその周辺」「4.河越館とその周辺」「5.城下町川越」の5つのテーマを設け、地域毎の遺跡の特色をわかりやすく展示しています。

この出土品展を通して、足元に眠る埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ幸いです。



弁天南遺跡(第3次調査)出土土器

### 資料寄贈者名簿

敬称略 順不同

H4年	明田柄栄	坪井義雄	梅沢光子	山崎明良
	山口長太郎	矢部道雄	竹内元幸	小島健一
	原口久江	村角よし江	田中信義	木村芳夫
	間坂宏	浜野千三	吉川啓助	武内喜久江
	新井正夫	沼田衆三郎	川越市役所庶務課	川越市役所管財課
	大室しま	農業ふれあいセンター	橋本義文	牛窪義次
	新井善次郎	原田進	大谷米穀店	橋本淳子
	森吉工務店	相原求一郎	荒牧澄多	布施和子

資料をご寄贈いただき厚く御礼申し上げます。5年以降は次号以降でご紹介します。

ご寄贈いただいた資料は、今後「収蔵品展」等でご紹介させていただきます。

### ❀❀利用状況❀❀

(単位:人)

月	一般			団体			共通				その他			合計 入館者合計
	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	他館購入	招待	免除		
3月	2,836	326	519	408	0	0	1,851	187	196	3,551	353	2,644	12,871	
4月	3,394	283	633	584	23	8	2,395	166	253	4,860	291	1,833	14,723	
5月	5,258	689	965	327	9	193	4,537	733	419	7,980	247	7,524	28,881	
6月	1,833	163	328	420	0	74	1,637	50	57	2,529	82	7,856	15,029	

発行日

平成5年11月25日

発行

川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号

TEL 0492-22-5399